

進路実現に向け、適応指導教室への通級を促す取組

《 概要 》

- 中学校第3学年の当該生徒は、小学校第4学年より不登校となり、稚内市教育相談所や適応指導教室職員が当該生徒及びその保護者に対する支援を行った。
- 当該生徒が安心して学べる場を確保し、進路実現に向けた支援を行うとともに、及び保護者に対する養育に関する指導助言を行った。
- 適応指導教室への通級支援、進路実現に向けた学習機会の確保、保護者に対する支援

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

- 安心して学べる場の確保と進路実現に向けた支援

- 保護者に対する養育に関する指導助言

相談・支援、取組等の状況

- ・ 適応指導教室への通級を促すため、生徒が興味を示す取組を設定したり、適応指導教室に通級する子ども同士が交流する場所や機会を設定したりするなど、適応指導教室における居場所づくり、絆づくりを行った。
- ・ 当該生徒の学力の定着状況を把握し、小学校の学習内容の振り返りを行うなど、個別の課題に応じた学習支援を行った。



【仲間と交流する様子】

- ・ 稚内市教育相談所や適応指導教室職員が保護者と面談し、支援の方向性を確認するとともに、保護者の養育について指導助言を行った。
- ・ 養育に対する保護者の困りごとや、養育の在り方等の交流をねらいとし、不登校の子どもをもつ保護者との交流機会を設定した。
- ・ 保護者に対する働きかけを行ったことにより、保護者が抱える精神的な負担の軽減を図ることができ、当該生徒の進路実現に向けて家庭との連携を促進することができた。

《 取組の成果 》

- 当該生徒が興味を示す取組を設定したことにより、継続的な適応指導教室への通級につなげることができた。
- 適応指導教室の仲間との交流や個別の課題に応じた学習支援を行ったことにより、当該生徒の自己肯定感が高まり、希望進路の実現に向けて前向きに取り組もうとする様子が見られるようになった。

児童のペースに合わせた学校復帰に向けた支援

《 概要 》

- 小学校第3学年の当該児童は、入学当初から欠席が多く、第2学年から不登校の状態となった。SSWが当該児童及びその保護者に対し、関係機関との接続を支援し、発達検査の実施や養育相談につなげた。
- 当該児童の学校生活に対する興味や関心を高めるため、自分のペースで活動できる場を設定するとともに、学校復帰に向け、体験活動の充実、補充的な学習、人間関係づくりに対する支援を行った。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

- 自分のペースで活動できる場の設定

- 補充的な学習や人間関係づくりに対する支援

相談・支援、取組等の状況

- ・ 学校及び当該児童の保護者と支援の方向性を確認し、週2日の登校日を設定した。
- ・ 1日あたり2時間の活動からスタートすることにより、当該児童の登校に対する心理的な負担感を軽減した。
- ・ 校舎の空き教室を利用した活動のほか、町内社会教育団体の協力を得て作陶体験や野外活動を実施するなど、当該児童が興味をもって取り組める活動を準備することにより、登校に対する意欲を高めた。
- ・ 計算プリントなど補充的な学習教材を準備するとともに、適応指導教室職員や、当該児童の学級担任が指導する機会を設定することにより、当該児童の学力の定着状況を把握し、適切な学習支援につなげた。
- ・ 活動場所を学校の空き教室としたことにより、当該児童が在籍する学級の児童と気軽に交流することができ、児童が安心して学校生活を送ることができるような人間関係づくりにつなげた。

《 取組の成果 》

- 当該児童の興味関心に基づく活動を設定したことにより、登校に対する意欲を高めるとともに、安定した生活リズムの形成につなげることができた。
- 活動場所を学校の空き教室に確保したことにより、当該児童が在籍する学級の児童や学級担任との交流機会の確保につながり、児童の学校復帰に対する不安感を軽減することができた。

生徒理解を基軸にした学校復帰支援～連携・信頼・自立～

《 概要 》

- 中学校入学当初から特別支援学級に在籍し、3年間適応指導教室に通級した。第2学年から学校と連携し、月別の計画を作成・実施することにより、週1～2回の登校が可能となった。
- 第3学年時において、学校・関係機関との連携をさらに強化し、生徒理解を深めながら、進路実現に向けた学習や最上級生としての自覚や行動について、重点的に指導した。
- 昼夜逆転の生活を改善するために、保護者との日常的な連携・情報交流を行うとともに、基本的な生活習慣を定着させるための指導の徹底を図った。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

○日常的な連携強化

○信頼感の醸成

○自立・自律

相談・支援、取組等の状況

- ・ 第2学年時に作成した「学校復帰支援プログラム」を再考し、年間の支援計画を再確認するとともに、具体的な目標を本人と一緒に設定した。
- ・ 学級担任との連携を密にし、数学科を中心とした学習や図書館の利用促進等について、指導の重点化を図った。
- ・ 学校の情報や日常的な学習等を通じて、生徒理解に努めるとともに、適応指導教室の各種行事の中で、最上級学年としての発信力、指導力、リーダー性を図る取組や指導を意図的に行った。
- ・ 定期的な教育相談の実施を通じて、近況や家庭での様子、考え方、進路面への不安、将来への悩みなど内面的な理解に努めた。
- ・ 当該生徒が毎日利用する放課後デイサービスや学校訪問から、日常的な生活の様子を情報交流し、生徒理解に努めた。
- ・ 来年4月以降は寮生活になることから、今後の目標や予想される生活の大きな変化などを一緒に考えるとともに、自立・自律の観点から指導助言した。

《 取組の成果 》

- 学校と家庭が連携を密にすることにより、基本的な生活習慣が身に付き、定期的な登校が定着した。
- 関係機関との情報交流をとおして、当該生徒の理解に努めたことにより、自立心や上級学年としての自覚が醸成され、適応指導教室での行事や日常生活でリーダーシップを発揮し、下級生に対する接し方に変化が見られた。

学校と適応指導教室を併用した支援体制の確立について

《 概要 》

- 中学校第2学年の当該生徒は、小学校第5学年で不登校になり、転校や中学校入学・進級の度に長続きせず、当教室に入級した。
- 学校の登校と適応指導教室の通級を通し、昼夜逆転した生活の改善を図り、登校機会が増加した。
- 学級担任との定期的な情報交換を通して、適応指導教室と中学校が連携した支援を行った。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

○生活リズムの調整

○コミュニケーション能力を身に付けることで生まれる自尊心

○登校の継続と社会的自立を目指す適応指導教室

相談・支援、取組等の状況

- ・ 当該生徒は、ゲームやインターネットの利用により昼夜逆転した生活となり、通級の大半が午後からになってしまっていたことから、利用について親子で話し合う時間を設定するよう支援した。
- ・ 行事や調理実習等には、数日前から生活リズムを調整し、午前中から参加できることから、定期的に機会を設定した。
- ・ 思ったことをそのまま口にしたり、相手が嫌がることを執拗に行ったりする等、集団生活を上手く行えない面があることから、自尊心を醸成するために、外部講師等による授業や課外学習を行っている。
- ・ 当該生徒の支援について、学級担任と話し合い、登校できない日は適応指導教室へ通級することとし、どちらにも登校可能な状態を整備した。
- ・ 週1回の登校の継続と通級について、入級前に当該生徒と保護者との話し合いの場を設定した。

《 取組の成果 》

- 当該生徒は、周囲とうまくコミュニケーションを図れず、他の生徒達から反感を買うようなことを繰り返していたが、外部講師の活用等、様々な人と接する中で徐々に自尊心が芽生え、人に優しく接することができるようになった。
- 学級担任や保護者と連携を図ったことにより、適応指導教室が当該生徒にとって登校できない時の居場所となり、精神的な安定を図ることができる等、支援体制を確立することができた。

不登校児童生徒を支援する市の体制整備の取組

《 概要 》

- 中学校第3学年女子生徒であり、集団での学習活動が苦手なため、中学校第2学年時の12月以降登校できなくなった。第2学年時2月から、適応指導教室に通級している。自分の考えを相手に伝えられないことが多く、保護者とともにスクールカウンセラーとの面談を定期的に受けている。
- 安心して過ごせる居場所作りをするとともに、学校以外での学習の機会を提供した。
- 市の学習支援を活用し、タブレットを使えるようにした。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

○学校以外での学習の
機会の提供

○市の学習支援の活
用

相談・支援、取組等の状況

- ・ 適応指導教室において、オンラインでの学習を行えるアプリ等を活用できるよう、タブレットを導入するとともに、市教委に使用方法についてサポートしてもらっている。
- ・ 市教委から「O J a C」（オンラインでの学習等を実施するプログラム）の話を勧めてもらい、適応指導教室以外の学習の場を設定している。
- ・ 周りに他の生徒がいても安心して学習をすすめることができるように、市教委主催の家庭学習支援事業「学紋塾」において、静かな環境の中でオンラインでの学習を行うことができた。
- ・ 生徒自らがタブレットの借用を言い出せない場面も多いことから、指導員から当該生徒に声を掛けたり、自分で取りに来やすいような雰囲気づくりを行ったりした。
- ・ タブレットの使用による学習内容の定着により、より自信をもって、学校で定期テストを受けられるようになった。

《 取組の成果 》

- 市教委主催の「学紋塾」での取組をとおして、少人数であれば集団にいられるようになった。
- 学習機会の確保や学習内容の定着により、週に1回程度、別室登校ができるようになった。
- 修学旅行の事前学習やテストを受けられるようになり、11月には登校日が週2回に増えた。また、修学旅行の事前学習では学級で活動することができた。

外部機関との連携体制の構築と連携機会の促進

《 概要 》

- 町内7校の中学校の内、生徒数が100名を越える中学校2校に各数名、9校の小学校に3校で極少数の不登校児童生徒が在学中である。
- 教育委員会を含める外部機関や学校との関わりに消極的な児童生徒家庭もあるが、教育専門員は、様々な機会を通じて児童生徒の育ちに関わっていくことを心がけている。
- 町の保健福祉課児童生徒担当者と概ね週に1度情報交流を実施したり、要保護児童対策地域協議会に参加し情報の交換や支援内容の協議を行ったりするなど、教育専門員が町内外の関係機関と積極的な連携を図り、児童生徒保護者の外部機関との連携機会の設定を促している。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

○町の保健福祉課等との連携

○要保護児童対策地域協議会への参加

○町内外の児童福祉法に関連する施設・事業者等との連携

相談・支援、取組等の状況

- ・ 週一日、教育専門員が町の保健福祉課の執務する場所に隣接する一室で教育相談を実施し、日常的に保健福祉課職員との児童生徒に係る情報交流を行っている。
- ・ 教育専門員が児童館(放課後児童健全育成事業)へ定期的な訪問を実施し、小学校と児童館との情報交流の一旦を担っている。
- ・ 要保護児童対策地域協議会に教育専門員が参加し、情報の交換や支援内容の協議を行った。
- ・ 児童相談所や福祉関係者、児童民生委員等、多数の関係機関担当者が参加する会議に出席することにより、様々な人的ネットワークを構築することができた。
- ・ 放課後等デイサービス実施事業者や障害児童相談支援事業所との情報交換等を行い、障がいや不登校要因の一つとする児童生徒の理解や支援に取り組んでいる。
- ・ 児童養護施設(北光学園)や児童自立支援施設(北海道家庭学校)がある町という特色を生かし、施設の知識や人材を活用している。

《 取組の成果 》

- 児童生徒の理解や支援につながる人的ネットワークを構築したことにより、多面的な児童生徒理解・支援が可能な体制を整備することができた。
- 要保護児童対策地域協議会に参加したことにより、保護者の生活能力等の課題を要因とした児童生徒の不登校等の課題解決に向けて、町の福祉担当者等と連携・協力することができた。
- 教育専門員が様々な研修会及び学習会への参加を継続的に行ったことにより、様々な課題を抱えた児童生徒に対応することができた。

不登校生徒が卒業後の進路を決定するまでの取組

《 概要 》

- 不登校生徒の状況
中学校第1学年において、学業不振と友人関係から登校できなくなり、その後適応指導教室への登校が続いている。
- 支援の目標や方向性
基礎学力の定着や周りと共に育てる気持ちを育て、学校(社会)生活へ復帰できるようにする。
- 取組内容
 - ・ 個別の学習指導（担任、支援員や複数の教員による対応）を継続させる。
 - ・ 行事への関わりや一斉授業に参加できる機会を設定する。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性	相談・支援、取組等の状況
<ul style="list-style-type: none"> ○回復段階 個別学習体制の確立 学習支援の継続 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学級担任をはじめ、多くの教職員が関わり、個別対応での学習支援を行っている。 ・ 個別の学習指導を行うことにより、教科によっては、一斉授業にも参加できるようになった。 ・ 各種テストも別室ではあるが、受験できている。
<ul style="list-style-type: none"> ○再登校段階 進路相談 体験活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・ スクールカウンセラーに定期的に相談することで、自分が行うべき取組（進路選択）が見え始めてきた。 ・ 学校行事の際は、自分のできる範囲で一緒に活動できるようになった。 ・ 適応指導教室で主催している体験活動に積極的に参加している。 ・ 高校入試に向けて、少しずつ学習意欲が高まっている。 ・ 定期的に学級担任やSSWと面談し、目標づくりや振り返りを行っている。

《 取組の成果 》

- 学習に対し自ら計画を立て、各種テスト等に向けての取組ができるようになった。
- 継続的な取組を行うことで、適応指導教室を欠席することはほとんど無く、通常の日課で活動することができるようになった。
- 多くの教職員とコミュニケーションを取ったり、カウンセリングを継続したりすることで、友達との関わりや卒業後の進路に向けて前向きな考えができるようになった。

学校と連携した学習支援と学校復帰に向けた取組

《 概要 》

- 小学校第5学年後半から不登校傾向となり、中学校第2学年の現在に至るまで登校していない。今年4月から適応指導教室に通級している。
- 相談員との関係構築や未習内容の定着を当面の目標とし、その後、学校復帰に向けた取組を行っている。
- 数学科を中心として学習内容の定着を図るとともに、Zoomによるオンライン授業で、教室の様子や授業内容に触れる機会を設けた。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

- 相談員との関係構築
 - ・コミュニケーション力の育成
 - ・目標の共有

○未習内容の補充

- ・学習意欲の喚起
- ・学習内容の復習
- ・学校・家庭との連携

○学校復帰に向けて

- ・SCの活用
- ・学校との連携
- ・居場所づくり

相談・支援、取組等の状況

- ・ 相談員とのコミュニケーションの時間を多く設定し、互いへの理解を深めることに努めた。
- ・ 本人の思い描く高校像と現状の状況に乖離が見られるため、実情を説明し、目標を共有した。
- ・ 当該生徒と相談し、各種テストにおける目標を設定することで、学習意欲を喚起している。
- ・ 授業動画、オンライン授業、ドリルなどを活用し、数学科を中心に効率的な復習を行った。
- ・ 学校・家庭と連携し共通プリントに取り組むことにより、学習内容の定着を図った。
- ・ SCとの面談を通して、他者との関わりを増やす取組をしている。
- ・ 6月から週1回放課後学校に行き、教職員と触れあう機会を設けている。
- ・ オンライン授業や運動を通して生徒との交流を促進し、同級生との距離を縮め、学級での居場所づくりをする取組を始めている。

《 取組の成果 》

- 昨年度は家庭訪問で学級担任とも会えなかったが、通級での指導をとおして人と関わり、コミュニケーションをうまく取れるようになった。
- 学習内容の定着に向けた取組を継続したことにより、学習意欲を喚起し、各教科への関心も高めることができた。
- 将来を見据え、高校受験という目標を立てることができたことにより、具体的な活動計画が決まり、安心して学習に取り組んでいくことができるようになった。